

経営部門

鹿児島県曾於市
有限会社 大隅ポーク

(代表：代表取締役 西園幸一)

高い生産性・収益性を生む 養豚経営の実践

平成 17 年度(第 44 回) 農林水産祭日本農林漁業振興会会長賞
平成 16 年度全国優良畜産経営管理技術発表会 最優秀賞



西園さんご夫妻と後継者の隆志氏

有限会社大隅ポークは、観察と記録・記帳を基本とする飼養管理の徹底と基本技術のさまざまな工夫、豚肉の品質と斉一性の向上による製品づくりと安定的な契約取引を行い、総所得 6108 万円、種雌豚 1 頭当たり 18.4 万円の高収益をあげている事例である。

経営主の西園氏は昭和 49 年から養豚を手がけ、昭和 52 年に専門化し、種雌豚 40 頭の一貫経営を本格的にスタートさせた。昭和 60 年に種雌豚が 130 頭になったのをきっかけに有限会社大隅ポークを設立している。その後も計画的な設備投資と借入金の返済、自主施工等徹底的な経費の抑制によるコスト低減、環境整備を伴っての規模拡大を着実にいき、現在、経営主夫婦と長男、5 人の従業員による 8 人で母豚 331 頭を飼養し、年間 7700 頭を出荷している。

特徴の第 1 は、基本的な技術の実践により高水準の生産性、収益性をあげている点である。繁殖成績は分娩回数 2.37 回、子豚育成率 95.9%、種雌豚 1 頭当たり年間肉豚販売頭数 23.2 頭、さらに肥育成績も平均肥育日数 162 日、肥育豚飼料要求率 2.79、枝肉規格上物率 83.5%と高い。この技術成績を実現しているのは、独自に取り組んできたさまざまな飼養管理上の工夫と、「省力化できるところは省力化し、豚の管理、観察に時間をかける」という経営理念によるものである。なお、経営主はこの理念を徹底するため、定常作業のマニュアル化とその徹底で作業の平準化を図るとともに、記録・記帳の励行と日常的な飼養管理データに基づく定期的な実績分析と改善策の話し合いを構成員と従業員が一緒になって実施している。

第 2 は、優良種豚の選抜技術と人工授精技術の導入である。ヨーロッパ研修を経て就農した後継者によって経営内にもたらされた同技術は、種豚生産の技術や設備を持たない中小規模の養豚経営にあって優れた繁殖成績と肉質の維持による安定生産に寄与している。

第 3 は、従業員と一体となった生産性の向上を図るための人材育成の考え方である。構成員である経営主も後継者も高い飼養技術を有するが、従業員全員が経営に携わっているという意識の徹底とやる気の醸成を図るため、それぞれの業務分担と責任体制を明確化するとともに、飼育成績に基づく報酬制を導入、そのうえで前述の実績分析と改善策の検討を全員で行っている。また、自身の理念を徹底するため、雇用に養豚未経験者を雇用するなどの工夫も行っている。

第 4 は、好まれる豚肉づくりである。平成 2 年に県外養豚家を含む 6 人で「美味豚(あじとん)グループ」を結成し、飼養管理や種豚改良などの検討を繰り返す、その結果をもとに平成 7 年からスーパーとの取引契約を開始した。現在、「こだわりの逸品 鹿児島県産 美味豚」として枝肉 1kg 当たり平均価格 421 円という安定かつ高付加価値販売を行っている。

このように、生産面では高収益を得る独自の飼養管理技術の工夫を行う一方、販売から労働、経営形態にいたるまで総合的に経営課題を解決している家族労働中心の中規模養豚経営であり、普及に値する経営である。

最後に、後継者は地域でも認められる高い技術をもって就農し、当経営の技術水準をさらに高めている。後継者の就農が単なる経営の継続という安定をもたらすだけでなく、さらなる強みをもって経営向上のために機能しており、まさしく地域の担い手たる経営である。

▼豚舎内

整然と管理された清潔な豚舎内部。



▼個体管理

綿密に個体管理されており、それが繁殖成績にあらわれている。



▼低コスト畜舎

畜舎は基礎以外は自ら建築しコストを抑えている。



▼廃汁溝

廃汁溝にいたるまで経営者が自ら設置したものである。



▼スラリー

近隣の養豚経営と共同で利用している。



▼PBへの取り組み

宮崎県の生産者と共同で生産しているプライベートブランド「あじ豚」のマーク。

